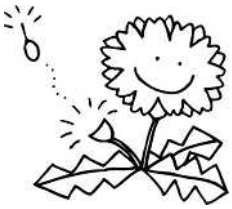
人とかかわる力を育てるための援助の工夫

～友達と一緒に活動することを通して～



那覇市立石嶺幼稚園教諭

兼島　良乃

目次

Ⅰ　テーマ設定の理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
Ⅱ　研究目標　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
Ⅲ　研究仮説　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　１　基本仮説
　２　作業仮説
Ⅳ　研究構想図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
Ⅴ　研究内容　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　１　人とかかわる力
　　(1) 幼児期における人とかかわる力
　　(2) 自発性と人とかかわる力
　　(3) 幼児期における個と集団の役割
　　(4) 幼児期における協同性
　２　幼児理解の視点
　　(1) 幼児の行動の意味を捉える
　　(2) 幼児のよさを捉える
　　(3) 個と集団の関係を捉える
　　(4) 家庭との連携を図る
　３　援助の視点
　　(1) 教師の役割
　　(2) 人とかかわる力を育むための援助の視点
Ⅵ　保育実践　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　１　幼児観
　２　保育観
　３　検証保育までの実践
　４　検証保育指導案
　　(1) 保育仮説
　　(2) 保育の展開
Ⅶ　結果と考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
Ⅷ　研究の成果と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
　１　成果
　２　課題

《主な参考文献と資料》

《幼児教育》

人とかかわる力を育てるための援助の工夫

～　友達と一緒に活動することを通して ～

那覇市立石嶺幼稚園教諭　兼島 良乃

Ⅰ　テーマ設定理由

社会の変化において，少子化・情報化・経済的な格差が生じている中，コミュニケーション力不足，自制心や規範意識・人間関係の希薄化といった問題が指摘されている。また，子ども達を取り巻く環境の大きな変化によって，人間として生きる力の育ちや幼児期からの心の育ちを支える保育のあり方が，改めて課題となっている。

今回，改訂された幼稚園教育要領の中の領域人間関係において，「身近な人と親しみ，かかわりを深め，愛情や信頼感をもつ」と示されている。それを受け，内容の取り扱いにおいても「幼児が互いにかかわりを深め，協同して遊ぶようになるため，自ら行動する力を育てるようにするとともに，他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること。」と新たに加えられた。また，教育基本法第１１条「幼児期の教育は，生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである・・・(中略)」，学校教育法第２２条「幼稚園は，義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして・・・(中略)」と明記され，幼児期の教育の重要性が明確に位置付けられた。

本園の幼児の実態において，友達と過ごす中で自分の思いをなかなか表すことができない，逆に自分の思いを通し，相手の思いに気付かない等の姿が見られる。また友達とうまくかかわりがもてず，一人で遊ぶことを楽しんだり，友達と一緒の活動が継続せず途中で遊びから抜けてしまったりする様子も見られる。これまでの私の保育を振り返ってみると，幼児が周りの友達とかかわる姿の表面的な関係だけを見て，かかわりを深めている，協力しあって一緒に活動していると捉えていたのではないかと感じる。さらに，一人で遊ぶ姿には，どうして友達とかかわらないのだろう,どうにかしてかかわらせようという思いが強く,幼児の内面を読み取り，一人一人の気持ちに沿った援助が十分ではなかったのではないかと反省する点が多くある。

幼児の人とかかわる力が育つためには，園生活において幼児が友達と一緒に活動することを通して，楽しさや喜びを味わい，試行錯誤や葛藤等の体験を重ねていくことが大切である。このような経験を重ねるためには，幼児が安心して自発的に活動し，周りの環境や人とかかわることができるような援助が必要であり，教師が一人一人に応じた幼児理解と援助の工夫をすることが重要である。

そこで，一人一人の幼児理解を深めるための視点をもう一度捉えなおし，幼児が人とかかわる力を育むための援助の工夫について研究したいと考え，本テーマを設定した。

Ⅱ　研究目標

一人一人の幼児理解を深め，幼児が友達と一緒に活動することを通して，人とかかわる力を育てるための援助を工夫する。

Ⅲ　研究仮説

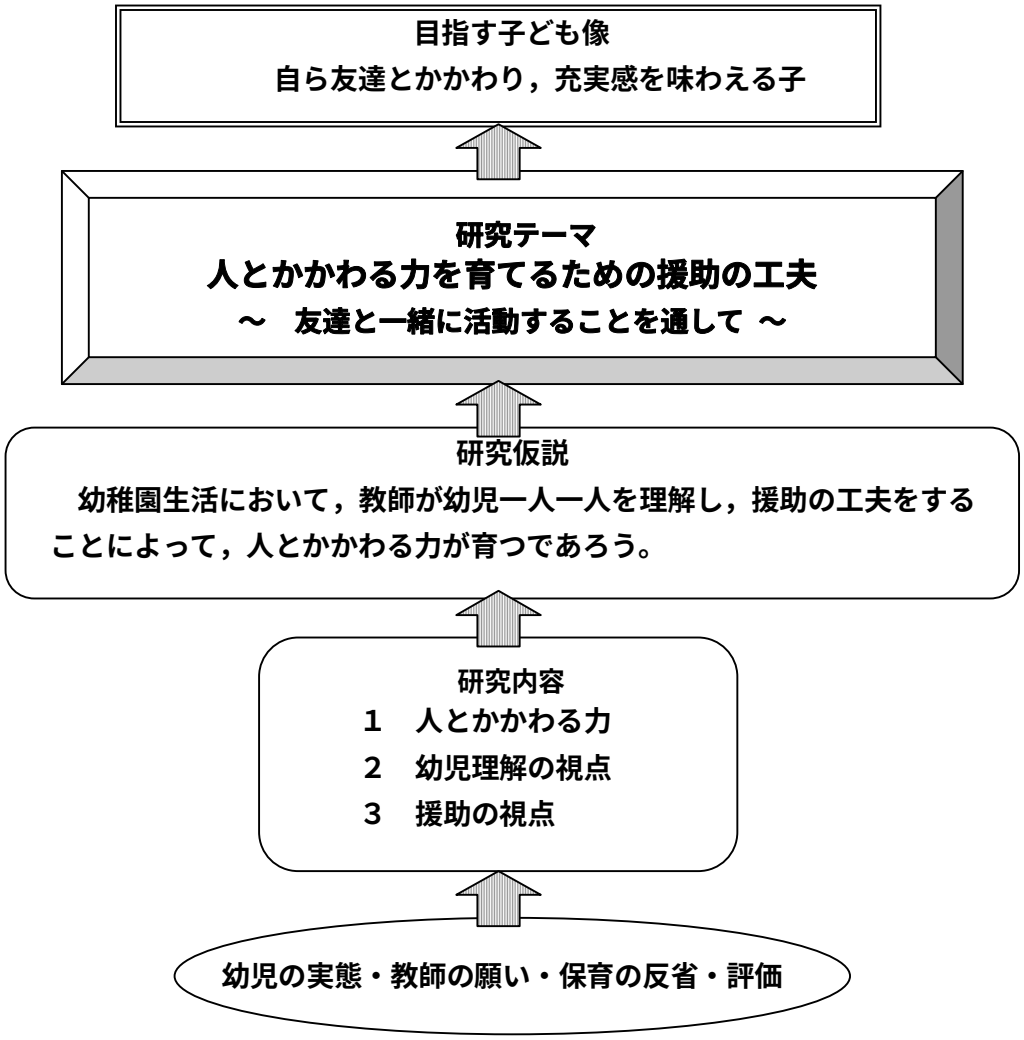
１　基本仮説

幼稚園生活において，教師が幼児一人一人を理解し，援助の工夫をすることによって，人とかかわる力が育つであろう。

２　作業仮説

幼児理解を深めるために，幼児のこれまでの育ちの背景や園生活における姿を捉え，一人一人に応じた援助をすることによって，幼児が自発的に活動することができ，人とかかわる力が育つであろう。

Ⅳ　研究構想図



Ⅴ　研究内容

１　人とかかわる力

(1) 幼児期における人とかかわる力

幼児期は，家庭における保護者との関係だけでなく，自分以外の幼児の存在に気付き，次第に友達とのかかわりを求めるようになる時期である。

幼児期に過ごす幼稚園生活は，教師や友達とのかかわりを通して，安心して自己発揮したり，様々な感情を体験したりできる大切な場である。友達と一緒に活動する中で，楽しさや喜び，怒り，悲しさといった様々な感情や，葛藤，つまずき等の経験を重ねていくことによって，幼児は自己の存在を確認し，自己と他者の違いに気付くようになる。そして，他者の存在を意識し，心を通わせたり自己を抑制したりする経験をすることによって，友達関係が深まり，人とかかわる力が育っていく。

このように,園生活の中で,多様な経験や感情体験を通して育まれる人とかかわる力は，幼児の社会性や情緒の発達，興味・関心等の知的な面の発達へとつながり，意欲的な活動や友達とのかかわりをより高めていくためにも重要なものである。

(2) 自発性と人とかかわる力

幼児の発達の特性として，自発的・能動的に周囲の環境へかかわろうとする姿がある。幼児自らが環境に目を向けることにより，発見や気付き，おもしろさ，楽しさを味わい，興味・関心が生まれる。

園生活において，このような自発性・能動性が十分に発揮されるようになるためには，幼児が安心して活動できるよう，行動や心の動きを受け止め，認めたり励ましたりする教師の存在が大切である。幼児はこの安心感を基盤に，周りの環境や友達とのかかわりを広げ，様々な事柄への興味・関心を深めていき，それらにかかわる意欲を高め，さらに自発的な活動が深まってくる。

国立教育政策研究所 教育課程研究センターによる「幼児期から児童期への教育」の中において,「幼児期の教育において最も大切なことは，幼児一人一人の自発性をはぐくむことである。幼児期にはぐくまれた自発性は，生涯にわたって積極的に何かを学んだり，感動したり，さらには現状を改善していこうとする力の芽となる。このような自発性は幼児一人だけの力で獲得できるものではなく，教師や他の幼児たち，様々な人々とのかかわりの中ではぐくまれていく。」と示されている。

以上のことから，幼児自身がもつ自発性は，意欲的に活動するために欠かせないものであり，人とかかわる力の育ちに必要なものであると捉えられる。園生活において幼児の自発性を促すためには，教師の役割と友達との活動の充実が重要である。

本研究では，園生活の中で，幼児が多様な経験を通して，次第に人とかかわる力が育まれていくことに視点をあて，自発性の大切さを踏まえた幼児理解と援助の工夫を考えていく。さらに，自発性の発揮に必要な援助として，友達と一緒に活動し充実感を味わうことができるような援助の工夫を考えていく。

(3) 幼児期における個と集団の役割

集団において，幼児一人一人が自発的に集団生活に取り組み，友達とのかかわりを通して，充実感や葛藤など様々な気持ちや体験を重ねることが重要である。

教師は“個から集団へどのような過程をたどっていくのか，その集団の中で個がどのように生かされているか”という視点をもち，捉えることが大切である。

①個から集団への過程の捉え

個から集団への過程について，乳児期からの発達を見てみると，以下のようになる。

発達の時期	社 会 的 か か わ り の 捉 え
０歳児～１歳児 １歳児後半～２歳児	アタッチメント行動（ひと志向）の傾向が強まる。 乳児が他児に対して関心をもち行動を示すこと（社会志向行動）も見られる。 孤立した“個”ではなく，他児に強い関心をもち，かかわりながら“仲間関係を形成する芽生え”が表れている。 イメージしながら遊ぶが，それぞれの世界が独立しており，他児とのイメージの共有は未だできない。この時期は自分のイメージを豊かにもち，“つもり”であそぶことが大事である。
２，３歳児	これまでの“仲間関係を形成する芽生え”を基盤に，仲間関係を発展させていく。 それは決して直線的発達ではなく，トラブルや葛藤の中を通りながら，他児への認識を深め，少しずつ自分自身をコントロールすることができるようになっていく。 “３歳児のトラブル（つもりの明確化によるイメージのずれ）”の時期
４，５歳児	仲間関係が確立される。日常のなかで気の合う友達と過ごし，互いの存在を強く求め合うようになり，親しい友達になる。子ども同士で，友達関係がスムーズに変化できないとき，周囲の大人の温かい援助が必要。 自我の発達するこの時期こそ，“個”の育ちが発揮されるような保育が必要となる。

幼児期の人とのかかわりは，乳児期における能動的なかかわりを基盤に確立されていく。そして，それぞれの発達の過程において，他児の存在や他児との関係が重要になってくる。

このような幼児期の人とのかかわりを捉える際，個から集団への過程を“１対１，２～３人のグループ，それから集団へ”というように直線的に捉えようとしがちである。しかし，実際には，個人によってジグザグな過程をたどることを認識する必要がある。

②幼児期の集団

幼児期の集団は,遊びの中で自然に形成される関係が基本である。今井和子(1992)は，いろいろなつながりの要素を含んだ以下のような集団があると述べている。これらの集団は，幼児一人一人が自発的に友達とつながりをもつことで，活発に活動することができる集団である。

「気の合う幼児が２人，３人と増え仲間意識を確かめ合う集団」
「自分の好きな活動を仲立ちに仲間が集まってできる集団」
「住まいや生活の場を拠点に仲間関係ができる集団」

一緒に活動する
楽しさ，葛藤や我慢する
複雑な気持ちを味わう。
⇩
相手の思いに気付く

また，その他に，教師が意図をもって定めた「生活グループ」がある。
この小グループは，「人とのかかわり方に気付いていく」というねらいを含む。

幼児同士の力関係が固定化し，いつも自分の意見を押し通そうとする子の場合や，新しい刺激が必要な場合は，相互関係を見ながら，臨機応変に変えていく柔軟な対応も必要である。

「生活グループ」

自分の思いを伝えたり，相手の言うことを聞いたりする「話し合い」を経験する機会となり，グループの**人間関係をつくり出す**大事な要素が含まれている。

園生活には，以上のような集団が存在する。実際に幼児の活動を捉えるとき，その集団がどのような集団か，どのような活動，経験ができるだろうか等について，教師が丁寧に捉えることが必要となる。その際，教師は集団という形にとらわれて，どの子も同じように集団にかかわれるようにと促すのではなく，一人一人の発達を捉え，幼児なりに自発的なかかわりをもとうとする姿を捉えることが幼児理解と援助の視点として重要であると考える。

そこで本研究では,一人一人が活動に参加しやすい集団の形態と,その活動内容が個々にとって充実したものになるよう援助していくことを通して，友達と活動できる場においての幼児の姿の変容を捉えていく。

(4) 幼児期における協同性

幼児期における協同性は，ただ共に過ごすだけのかかわりでは深まってはいかない。教師が，幼児同士の活動における「集団の中のコミュニケーションを通じて共通の目的が生まれてくる過程」や，「幼児が試行錯誤しながらも一緒に実現に向かおうとする過程」，「いざこざなどの葛藤体験を乗り越えていく過程」を把握し，各過程で幼児が経験し得た課題を乗り越えていけるように援助していくことが重要である。

①幼児期前期（３，４歳児）

他児と同じ場や物を共有することで，他児の動きをまね，新たな感覚を体感したり，遊具等とのかかわり方を学んだりしていく。また，同じ場で感情を共有することは，幼児の共感性を豊かにし，人とつながる喜びを感じられるようになる。このような協同性が芽生え，仲間関係ができてくると，自分の思いを言葉や身体で伝えようとしたり，受け入れられなかったり等，様々な経験をすることへとつながっていく。

②幼児期後期（５歳児）

一緒に遊びや作業をすすめていくことができるようになり，気の合う友達と共同的な遊びを楽しめるようになる。互いに思いを主張したり，折り合いをつけたりする経験を繰り返すことによって，共通の目的を実現することへ向けて，多くの友達と役割を分担し協力しながら活動を進めていく「協同する遊び」が展開できるようになる。また，ルールのある遊びを好み，互いに考えを受け入れることもできるようになることから，自分と他者とがお互いに気持ちよく過ごせる関係性を求めるようになり，協同性が育ってくる。

２　幼児理解の視点

幼児の人とかかわる力を育むためには，教師が幼児と一緒に園生活を過ごす中において，幼児の内面を読み取ることが大切である。その際，幼児自身のこれまでの生活経験や発達，興味，関心等により，ものや人とのかかわりの受け止め方が一人一人異なることを踏まえることが，教師の姿勢として大切である。そして，幼児の姿を捉える姿勢と教師自身の保育を振り返る姿勢が，幼児理解に大きく影響することを十分認識する必要がある。

本研究においては，幼児理解の視点を下記のように捉え，個の姿，個と集団の関係を丁寧に理解し，援助へと生かせるようにしていく。

(1) 幼児の行動の意味を捉える

一人一人の活動が，その幼児にとってどんな意味をもっているかを捉える。教師は，目の前に起こる活動の流れだけを追うのではなく，生活を共にする中で，幼児と同じ行動や同じ目の高さに立ち，さらに周囲の状況や前後のつながりなどと関連付けて考え，心の動きや活動の意味を感じ取っていくことが必要である。

(2) 幼児のよさを捉える

教師は，幼児と温かいかかわりをもち，行動を信頼し見守ることが必要である。その視

点で幼児の言動や表情を捉えることにより，よさや可能性，発達する姿，心の動きなどを受け止め，理解しようと努力することが大切である。

(3) 個と集団の関係を捉える

個々を見る目と集団を見る目の両方が必要である。集団の表面的な活動ではなく，集団の中の一人一人の行動，そのやりとりやそれぞれの気持ち，そして周りの状況との関連も含めて，幼児の変容を捉えることが必要である。

また，幼児のかかわりの実態だけではなく，教師自身の集団へのねらいやその育ちについての考え方，援助のし方も合わせて捉えることが大切である。

(4) 家庭との連携を図る

一人一人のこれまでの生活や遊び,今取り組んでいる活動の展開等を理解するためには，園生活だけではなく，入園までの生活経験，毎日の降園後や登園までの家庭での様子などを把握することが大切である。そのために教師は，保護者との信頼関係を築き，家庭との連携を十分に図る必要がある。

3　援助の視点

幼児が人とかかわる力を育むためには，先に述べた幼児理解の視点を踏まえた教師の援助が重要となる。教師は，幼児の行動や表情を捉えて内面を理解し，その発達の過程を見通したねらいや内容をもって，保育を展開しなければならない。その際，一人一人が自発的に活動し，互いにかかわり合える集団となるよう，様々な役割に応じた援助の視点をもつことが大切である。

(1) 教師の役割

①活動の理解者としての役割：家庭との連携を図り，一人一人の発達やこれまでの生活経験,周囲の物や人との関係を捉え,活動の意味を理解する。

②共同作業者としての役割：幼児の行動の意味を捉え，心情に共感することで，さらに自発的な活動ができるようになる。

③モデルとしての役割：教師の日々の言動は，幼児にとって憧れを形成するモデルである教師が一人一人を大切にする姿勢が，幼児同士の互いを大切にする姿勢，温かい関係をつくり出すことにつながる。

④遊びの援助者としての役割：一人一人の発達の段階に応じた援助のタイミングや援助の仕方を考え，幼児の遊びの深まりや課題に応じた援助を行う。

⑤集団生活における役割：個と集団の関係を丁寧に捉え，集団の中で個々の幼児がその発達に応じて様々な経験をすることができるよう，共に園生活をつくり出していく。

(2) 人とかかわる力を育むための援助の視点

以上のような教師の役割を踏まえ，園生活における幼児の人とかかわる姿を視点とし，主な教師の援助について，次の表に示した。

[　　] 援助の視点	援助の具体例
[幼児が安定して過ごせるようになるために]	・気持ちを受け止める。 ・スキンシップをとる。 ・遊びの楽しさを共感する。 ・温かい雰囲気をつくる。
[友達と一緒に活動できるように] [共通のイメージをもつことができるように] [自分の思いを表すことができるように] [気持ちに折り合いをつけることができるように]	・思いを受け止める。 ・一人一人の存在を大切にする。 ・友達関係を捉える。 ・仲介する。 ・代弁する。 ・思いを出し合える雰囲気をつくる。 ・伝え方のモデルとなる。 ・集団で活動する場を設ける。 ・遊びコーナーを整える。 ・遊具の貸し借りできる環境を設定する。 ・一緒に遊びを楽しむ。 ・イメージがつながるようにする。 ・他児と楽しさを共有できるようにする。 ・互いに相手の思いに気付いたり，思いを受け入れたりできるように見守る。 ・自己主張のぶつかり合いや葛藤を重ね，自分の気持ちを調整することができるような経験を大事にする。 ・心のよりどころとなる。
[自ら活動に参加するようになるために]	・個々の育ちを捉える。 ・自信をもてるよう温かく励ます。 ・意欲や頑張りを認める。 ・行動を見守る。 ・一緒に活動する。 ・できた喜びを共感する。 ・よさを知らせる。 ・自分で考え，行動できる機会を設ける。

本研究では，上記のような援助の視点をもちながら，一人一人に応じた援助をしていくことで，個の活動と集団の活動の充実を図り，幼児の人とかかわる力を育むための実践に取り組んでいく。

Ⅵ　保育実践

1　幼児観

クラスの８割以上が保育園での集団生活を経験しており，入園当初より，園生活にスムーズに慣れる姿があった。その一方，周りの様子に関心はあるが，自分から遊びに参加できない子や他児と同じ場にいるものの，一人で遊ぶことを楽しんでいる子もいた。また，集団生活が初めてで，どのように過ごしたらよいか分からない様子で不安な表情の子も見られた。

気の合う友達と過ごすようになると，遊びの中で友達と思いがぶつかり合う等のトラブルが起こり，このような経験をくり返すことで，友達と一緒に少しずつルールを作り，競争を楽しんだりする様子も出てきた。しかし，友達の思いを受け入れられずに自分の思いのまま行動したり，一人で過ごしたりすることに満足し，友達とのかかわりが持てない子もいる。

2　保育観

現在，園では生活発表会へ向けての取り組みが始まり，クラス全体の取り組みとして，オペレッタがある。その活動の中で幼児なりのイメージをもち，それを友達と互いに伝え合い，共通のイメージをもつことができるよう援助していきたい。また，オペレッタを進めることを通して，発表会という大きな目標に向かって友達とかかわる楽しさや友達と力を合わせて取り組む充実感を味わわせたい。

3　検証保育までの実践

教師の援助として，次のように視点をおく
[安]：幼児が安定して過ごせるようになるための援助　　[思]：自分の思いを表せるようになるための援助
[自]：自ら活動に参加するようになるための援助　　[友]：友達と一緒に活動する場の設定
[気]：気持ちに折り合いをつける経験のための場の設定　　[イ]：共通のイメージをもたせるための援助

□幼児の活動　■変容	○ねらい　△内容	◎教師の援助　※環境構成　[　]援助の視点
11月第27週 □発表会の劇遊びについてイメージできるよう，クラス全員で集まり，物語や役のイメージを出し合う。 ■ｼﾞｬﾝｹﾝｹﾞｰﾑに喜んで参加し，『おおきなかぶ』のイメージを楽しむ姿があった。 ■全員で話し合う場では，教師がそれぞれの考えを受け止めることで，自信をもって発言する姿や一緒に活動してみたい意欲が出てきた。	○クラスの出し物について知り，発表会への期待感をもつ。 △オペレッタ導入のジャンケンゲームを通して，友達と一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。 △物語や登場人物のイメージをみんなで話し合い，オペレッタへの期待感をもつ。	[安] ◎活動のイメージが湧かず，不安な表情の子へは，気持ちが安定するよう配慮し，その子なりのペースで参加できるようにする。 [自・友] ◎友達と一緒に過ごす楽しさを味わえるよう，ジャンケンゲームを設定する。 ◎友達を誘えず困っている子に対しては，自分で友達を誘えるように励ましたり，その様子を他児へ伝えたりしながら，一緒に参加できるようにする。 [イ] ※役の種類がイメージしやすいように，役決めの場では各役の表示をする。 ◎自分の役の絵を描かせ，自分なりのイメージを表現できるようにする。
12月第28週 □役になりきり，セリフや踊りを考えたり話し合ったりする。 ■自分のやりたい役を選ばせることで，主体的に参加できるような雰囲気となり，友達とのかかわりが広がった。 ■教師が一人一人のよさを認めることで，互いに相手の考えを受け入れたり，一緒に活動する気持ちが高まったりした。 ■教師もグループ活動に一緒に参加することで，個々の思いや活動の楽しさを共感できた	○友達と一緒に話し合う中で，自分の思いを伝えたり，相手の思いを聞いたりし，共通のイメージをもつ。 △友達と一緒に役のイメージを話し合ったり，セリフや踊りを楽しんだりする中で，自分の役についてイメージをふくらませる。	[気] ◎役のイメージについて互いの思いを出すことができるよう，役毎のグループで話し合う場を設定する。 [安・友] ◎一人一人にイメージを聞き，その思いを受け止めながら，他児へなげかけ，それぞれが思いを伝えやすい雰囲気作りをする。 [思] ◎自分の思いが他児に認められた嬉しさに共感したり，相手の思いを受け入れた気持ちを認めたりする。 [自] ◎教師も一緒に役になりきって動いたり踊ったりし，幼児がのびのびと楽しく参加できるような雰囲気を作る。 ※役になりきって遊ぶことができるように，必要な材料や曲等を準備する。
12月第29週 □必要な小道具等のイメージを話し合い，製作を楽しむ。 	○友達と共通の目的をもち，一緒に活動に取り組む楽しさを味わう。 △練習や話し合いの場でアイディアを出し，必要な小道具等を考える。 △一日の見通しをもち，友達と一緒に練習に取り組む。	[気・思] ◎グループやクラス全体の練習を通して，楽しんだり頑張ったりする姿を認め，充実感を味わえるようにする。 ◎友達と一緒に小道具等の製作に取り組めるように，互いのアイディアを聞いたり認めたりする場をもつ。 ◎互いに思いがぶつかり合う場面では，一人一人に応じて援助する。 [安・自] ◎活動に参加しない子の気持ちを捉え，その子の思いに耳を傾けたり，励ましたりする。また，グループの子とかかわる中から活動に興味が持てるよう援助する。 ※製作に必要な材料，製作コーナーを準備する。

4　検証保育指導案

(1) 保育仮説

発表会への取り組みにおいて，幼児同士のかかわりが持てるように，役ごとのグループで活動できるようにすることによって，自分の思いや考えを相手へ伝え合うことができるであろう。

(2) 保育の展開

幼児の姿	・グループの子と誘い合いながら，オペレッタの役になりきり，進んで踊りを楽しむ姿が見られる。 ・友達と一緒に踊りに必要なリボン作りを楽しみ，友達に作ってあげたり，教えてあげたりする姿が見られる。	ねらい	・友達と共通の目的をもち，一緒に活動に取り組む楽しさを味わう。
		内容	・必要な小道具についてグループで話し合う。 ・友達と一緒に自分達で考えた小道具を楽しんで作る

時間	予想される幼児の活動	◎教師の援助　※環境構成　[　] 援助の視点
8:15	○登園 ・挨拶をする ・所持品の始末，おたより帳にシールを貼る。 ○朝の会 ・一日の流れを知る ○朝の活動 ・園庭の清掃をする ・飼育物の世話をする ○好きな遊び 〔園庭〕縄跳び・竹馬・やっとこ・フープ・ホッピング・固定遊具・集団遊び	◎幼児一人一人と挨拶を交わし，健康状態を把握する。 ◎気持ちよく一日が始められるような雰囲気を作る。 ◎所持品の始末をスムーズに行っているか確認する。 ◎一日の予定を伝え，幼児なりに見通しをもって行動できるように話をする。[安・自] ◎幼児と一緒に活動に取り組み，きれいになった気持ちよさを共感し，最後まで頑張った姿を認める。[自・友] ※遊びに必要な遊具を使いやすいよう整理する。 ※幼児と一緒に遊具を準備する。 ◎安全面に十分配慮しながら，幼児が進んで活動できるように見守り，必要に応じて指導する。 ◎挑戦する姿を認め，できた喜びに共感し満足感が味わえるようにする。[自] ◎縄跳びでは，様々な跳び方に挑戦したり，幼児なりに跳ぼうとしたりする意欲を認め，自信につなげる。 ◎竹馬・やっとこでは，安全に使えるよう配慮しながら，歩けた距離を喜ぶ姿に共感したり，友達に教えてあげたりする姿を認めていく。 ◎フープでは，回す以外の技を考え，練習しているので，友達同士教え合い，工夫したり，励まし合ったりする場になるよう援助する。
9:40	○片付け ・使った遊具を元の場所へ戻す ・うがい・手洗いをする ・排泄を済ませる	◎自分が使ったものを進んで片付ける姿を認め，周りにも知らせながら協力して取り組めるような言葉かけをする。[自･友]
10：00	○発表会へ向けての活動 ・今日の活動について話を聞く ・各グループに分かれ，製作活動に必要な場を用意する。(机・椅子・はさみ・クレヨン・のり等) ・役に必要な小道具や飾り等を話し合い，一緒に作る。	◎昨日話し合ったことを全員で確認しあい、これからの活動の流れをイメージできるようにする。[友] ※必要な材料･道具を使いやすいように表示や分類をしておく。 ◎道具類の使い方を再確認し，安全指導を行う。 ◎自分のイメージを表現したり，グループの子同士のイメージや考えを伝え合ったりできているか様子を捉え，言葉をかける。[気・イ] ◎自分の思いが認められた嬉しさに共感したり，相手の思いを受け入れる様子を認めたりする。[思] ◎活動に参加しない子の気持ちを捉え，グループの子とかかわる中から活動に興味が持てるよう援助する。[安・自]

	○片付けをする ・使った遊具を元の場所へ戻す	◎互いに思いを伝え合えず，トラブルが起こる場合いは，幼児の気持ちを受け止めつつ，相手の思いに気づくように話し合ったり，伝え方を知らせたりする。　[友・イ] ◎一緒に片付けに参加し，きれいになった気持ちよさを共感する。 ※片付ける場所を表示する。 ◎グループ毎に一緒に工夫した点を発表し合ったり，頑張った姿を認め，それを他児へ伝えたりする。　[友・思]
11:00	○集まる	◎今日の製作活動の楽しかった点をふり返り，明日の活動へ期待がもてるように話し合う。

Ⅶ　結果と考察

【検証】

幼児理解を深めるために，幼児のこれまでの育ちの背景や園生活における姿を捉え，一人一人に応じた援助をすることによって，幼児が自発的に活動することができ，人とかかわる力が育つであろう。

(1) 第 27 週～本時までの実践

【結果】

発表会へ向け，友達と一緒に取り組む場として，グループ活動を取り入れた。これまでの活動において見られた各グループの幼児とグループの変容を以下にまとめた。

各グループの幼児一人一人の育ちに応じた援助の視点を下表の[　　]内に示す。

グループにおける幼児の姿	[　　] 援助の視点	幼児の姿の変容
幼稚園・６年生役グループ Ｉ児はＥ児の思いに沿って行動し，なかなか自分の思いを表さないまま活動に参加している。 また，グループの中には，活動への意欲はあるが，イメージが湧かずに停滞し，互いにかかわりがもてない子がいる。	[気持ちを受け止める] [仲介する]	Ｉ児はＥ児と一緒にいる安心感をもちながらも，自分なりに表現したり，他児とかかわる場でも明るい表情を見せる。 ６年生役の子が中心となり，グループの活動が活発になり，楽しく参加する姿が見られる。
サンタクロース役グループ 役をイメージしやすかったため，互いにアイディアを出し合う姿がある。 M児は自信がない表情で，傍観する。他児がM児を励まし，活動に誘う姿が見られる。	[温かく見守る] [気持ちを受け止める]	製作活動では，互いにアイディアを伝え合い，認め合う姿がある。次第にM児も活動に参加するようになり，他児に作り方等を教えてもらいながら，意欲的に製作に取り組むようになった。
ドラゴンボール役グループ K児がリードし，活動が進む。他児はそれに従っている様に見える。 しかし，K児は提案の際，全員にどう思うかを尋ねていて，他児もそのやりとりを楽しんでいる。	[友達関係を捉え，それぞれのよさを認める] [意欲を認める]	K児のアイディアを取り入れながらも，一人一人が自分なりに製作したり，発表したりし，友達と活動する充実感を味わっている。

まほうつかい役グループ

R児もH児も張りきって製作活動に取り組むが，互いのかかわりは深まっていない様子。
互いにかかわるきっかけをつくるが，R児はなかなか自分の思いを表せず相手へ伝えられずにいる。H児は相手の表情を見ながらも自分の考えを折れずにいる。

⇒ [それぞれの思いを認める]
[互いの思いに気づくことができるよう仲介する] ⇒

互いの思いを出し合えるよう,きっかけをつくることにより,H児なりに自分の思いに折り合いをつけ,相手の思いに気づくことができ,次第に他児と一緒に製作を進める楽しさを味わうようになった。
一方,R児はアイディアを受け入れてもらう嬉しさを味わい,他児を意識し,考えを伝えたり聞いたりする姿が見られるようになった。

かぶ役グループ

気の合う友達同士で役を決め，練習や製作に誘い合って楽しく参加している。しかし，セリフや動きを決める際，自分のイメージを互いに主張し合い，折り合いがつかずケンカになり，まとまらず困った表情を見せる。

⇒ [友達関係を捉え，それぞれのよさを認める]
[互いの思いを受け入れられるよう仲介する] ⇒

互いに思いを受け入れられず,葛藤を経験したことにより,自分の考えばかりではなく,相手の思いに気付いたり,互いにアイディアを認め合ったりする姿も見られるようになった。一人では味わえない活動の楽しさや友達と一緒に製作を進める充実感を味わい,友達との会話やグループで活動する意欲が高まった。

以上のような視点で援助していくことで，グループの友達関係が刺激となったり，友達に自分を受け入れてもらったりする様子が見られ，個の変容と共に，グループや学級における活動にも意欲の高まりが見られた。

このような幼児の変容につながった援助の視点を次の６つにまとめた。

[自ら活動に参加するようになるために]

本時までの実践において，子ども達が好きなジャンケンゲームを取り入れ，友達と触れ合う機会を設けた。また，教師も一緒に活動に参加することで，どの子も安心して参加できる雰囲気を作り，友達と過ごす楽しさを共感することができるよう援助してきた。その結果，気の合う友達を誘い合ってリズムを楽しむ姿や，友達と遊ぶ楽しさを味わいもっとやりたいと意欲をもつ姿も多く見られた。

[幼児が安定して過ごせるようになるために]

一方，不安な表情で活動を傍観する子がいたが，気持ちを受け止め，安心できるよう言葉をかけ，その子のペースを見守った。周りの子へ本児の状況を知らせることで，受け入れてもらえる安心感を得，本児も活動に参加するようになった。

[共通のイメージをもたせるために]

子ども達のアイディアを出し合えるような話し合いの場を設定し，それぞれの考えを教師が認めることにより，自信をもって発言する姿やそのような友達を見て刺激を受け，楽しそうな表情を見せる子もいた。

[自分の思いを表すことができるように]

いつでも幼児の意欲が高まったときに取り組めるような環境を整え，役の絵を描く場を設けることで，幼児なりにイメージを表現し，それを教師が認めることにより，楽しさや充実感を味わう姿が見られた。また，自分の考えを言葉で伝える大切さを教師がモデルとなって示すことで，教師や他児へ思いを伝え，かかわろうとする様子が多く見られた。

[友達と一緒に活動できるように]

友達と一緒に役を選ぶ中で，相談したり誘い合ったりする姿や，好きな役を選んだ者同士で会話を楽しむ等，友達とのかかわりが広がるきっかけとなった。

また，少人数で活動を展開することにより，幼児同士も相手の存在を意識しあうことができ，よりかかわることができた。

［気持ちに折り合いをつけることができるように］

グループで振り付け等を相談し，製作活動で自分のアイディアを表現する場において，互いに自分の思いを出し合えるような雰囲気をつくった。その中で，自分の考えを言葉で伝えられなかったり，互いに自己主張し折り合いがつかずに困ったり，寂しさを味わったりする姿が見られた。そこで，グループの友達関係及び個々の幼児に経験して欲しいことを見据え，実態に応じて伝え方を知らせたり，気持ちの立て直しができるように幼児の思いを受け止めたりした。それにより，相手へ思いを伝えようとし，互いに思いに気付き受け入れようとする姿が見られ，次第に友達と一緒に活動する楽しさや意欲へとつながった。

【考察】

- 幼児一人一人が活動に参加しやすいように，気の合う友達や好きな役を選べるグループを構成することで，互いにイメージをもつことができ，その嬉しさから，友達と一緒に活動したいという意欲が高まったと考える。
- 教師が各グループにおける友達関係や個々の育ちを捉え，それに応じて活動に一緒に参加したり仲介したりすることによって，幼児が自分の思いを出したり，他児の提案に耳を傾けたりすることができ，友達とかかわるきっかけや意欲をもつことへとつながったと考える。
- 互いに主張し合い，相手の思いを受け入れられない場面においては，それぞれの幼児の主張や気持ちを受け止めつつ，個々の実態に沿った援助をすることによって，相手の考えや気持ちに気付くきっかけとなった。また，互いに相手に認めてもらう経験をすることで，次第に友達とのかかわりも深まり，一緒に意欲的に活動することができるようになってきたと考える。
- グループや学級全体の活動においては，幼児同士のイメージの共有化を図ることが十分ではなかったため，グループで過ごす楽しさを味わうことや次の活動への意欲の高まりが弱かったように感じる。活動を振り返る場において，各グループの活動内容を認めたり，そのよさを学級全体へ言葉で知らせたりすることを通して，友達とかかわる充実感を感じられるような，場作りや言葉かけ等の援助が必要であったと考える。

(2) Ａ児の姿

【結果】

Ａ児は，初めての活動には参加せず傍観することが多い。その姿に対して，どうにかして活動に参加させよう，他児とかかわらせようという思いで接し，励ますことでＡ児が自信をもち，活動に参加するだろうと考え，援助してきた。しかしこの援助を振り返ると，教師の思いだけを通そうとするかかわりであり，Ａ児の傍観する姿について，なぜこのような行動をとるのだろう，その背景には，どのような気持ちや思いがあるのだろうという内面を読み取る大事な視点が足りないまま援助していたことに気付いた。

そこで,実際のＡ児の表情や行動を理解し,Ａ児の思いに寄り添った援助をするために，思いを丁寧に読み取る姿勢と，周りの状況とのかかわりを捉える視点をもち，Ａ児の気持ちが安定するような援助を進めてきた。更に，今回の活動を通して，周りの友達とかかわ

る楽しさや充実感を味わって欲しいと願い，援助してきた。

友達とのかかわり	A児の姿	教師の読み取り・援助［　　］
	クラス全員でオペレッタに取り組もうと話し合う	
	「やりたくない」 「お家で考えてもやりたくない」 表情は暗く，不安そう。	**不安な表情だな** ［安定を図る］ ［受け止める］［見守る］
張り切って役を選ぶ他児の姿が見られる。	周りの友達の様子や発言をさり気なく見たり聞いたりしている。 黒板の表示を見たり触ったりしている	**興味をもっているな** ［登場人物表示を提示］［待つ］
		関心があるようだな ［認める］［共感する］
	役決めの日	
A児は，同じ役を選んだ男児二人(B児，C児)とは，普段あまりかかわりがない。	「お家で考えてきたよ。じゃあ，幼稚園生役やろう。だって，Aは幼稚園生だから。」 自分から列に並ぶ。	**まだ不安そうだが，明るい表情で意欲がでてきたな** ［意欲を認める］［励ます］
	役の絵を描く活動	
B児，C児と絵を見せ合う。 A児の絵を見ることによって，役のイメージができたようで，B児もC児も取り組み始める。	絵を描くことが好きなA児は，はりきって描く様子がある。	**表情が明るくて，やりたい気持ちがあらわれているな** ［よさを認める］［知らせる］
	二人に認められたことで，A児も描くことを楽しんでいる。	
	グループでの活動	
6年生役のY児達は「いいよ！A児達も一緒にやる？」とはりきっている。	A児は活発なY児達の活動に関心を示す 初めのうちは，傍観していたが，Y児に誘われたことが嬉しかったようで，笑顔を見せる。 Y児と手をつなぎ，一緒に踊りの練習に参加するようになった。	**活動が停滞し困っているな** ［仲介する］［思いを代弁する］ **友達への関心が高まっているな** ［仲介する］［見守る］
	衣装作り	
Y児達が衣装を作りたいと提案してきた。	A児は一緒にやりたい気持ちを伝えることができないでいる。	**友達とのかかわりを楽しんでいるな** **自分から活動する楽しさを味わいつつあるな** ［共感］［仲介し見守る］ ［材料，場，時間を確保］
	A児は嬉しそうに製作活動に参加する。Y児と過ごすことができ，楽しそう。B児と相談する姿も見られる.	
	翌日～	
	「まだ途中だから，明日も作ってもいい？」 仕上げたい意欲があり，教師へ思いを伝えに来た。	**意欲をもって楽しんでいるな** ［意欲を認める］［共感する］
	毎日，衣装の飾りつけに取り組み，衣装ができあがると，嬉しそうに笑顔になり，教師へ見せる。	**満足感を味わっているな** ［認める］［共感する］
	本番当日	
	「先生，今日ね幼稚園来るとき，走って来たんだよ！」 言葉数は少ないが，表情は明るく，張り切っている。	**自信をもち，張りきっているな** ［受け止める］［励ます］

【考察】

- Ａ児の表情を捉え，不安な気持ちを受け止めることによって，気持ちが安定し，活動に対する気持ちに変化が現れてきた。さらに，他児の活動にも関心をもち，参加したい意欲が高まってきたのは，教師がＡ児の様子を見守りつつ，参加しやすい雰囲気や環境を整えたことによるものと考える。
- Ａ児の得意なことを認め，それをＢ児やＣ児へ知らせることで，他児とかかわるきっかけとなった。Ａ児が認められる場をさり気なく設定することで，自信をもち活動することができたと考える。
- Ａ児がＹ児達に関心を示す姿を捉え，一緒に活動できるように教師がパイプ役となった。Ａ児の思いを代弁し，かかわるきっかけをつくったり，Ｙ児達と一緒に過ごす楽しさを共感したりすることによって，Ａ児の表情が明るくなり，安心して自ら活動に参加することができるようになったと考える。

Ⅷ　研究の成果と課題

１　成果

(1) 教師が幼児の思いを受け止め，一人一人が活動に参加しやすい雰囲気をつくることで，幼児は安心し，自発的に友達とかかわりをもつことができるようになった。また，一人一人の行動や思いを認め温かく見守る教師の姿勢により，幼児同士も相手を大切に感じることができるようになった。

(2) 幼児の実態に応じた視点で，友達と共に様々な感情を体験できるよう援助することで，互いのよさに気づいたり，自分の気持ちを調整して友達の思いを受け入れたりする姿が見られるようになった。

(3) 幼児理解や援助の方法について学んだことを基に，幼児への援助を見直し工夫したことによって，他児に関心をもちかかわろうとする姿や，個々の活動の充実により幼児同士やグループ全体の活動が更に高まる様子などが見られた。

２　課題

(1) 幼児理解の視点の重要性を踏まえ実践してきたが，まだ教師の思いだけで幼児の姿を捉えてしまうこともある。これからも自分自身の保育を振り返り見つめ直すとともに，職員間の保育カンファレンスを充実させ，幼児理解の視点を深めていく必要がある。

(2) ５歳児の発達における協同性を捉える幼児理解の視点及び援助の工夫について，さらに研究の継続が必要である。

《主な参考文献と資料》

『幼稚園教育要領解説』	文部科学省	フレーベル館	2008
『事例で学ぶ保育内容〈領域〉人間関係』	無藤　隆	萌文書林	2007
『幼児期から児童期への教育』	国立教育政策研究所	ひかりのくに	2005
『幼児教育へのいざない』	佐伯　胖	東京大学出版会	2001
『幼児理解と評価』	文部省	フレーベル館	1993
『集団ってなんだろう』	森上史朗・今井和子	ミネルヴァ書房	1992
『保育のなかのかかわり』	森上史朗	フレーベル館	1991